

慧海潮音著『擱裂邪網編』

の刊年について

梅谷文夫

慧海潮音の『擱裂邪網編彈出定後語』二巻二冊『付録金剛索彈赤保保』一卷一冊は、文政十二年に、伊勢の森島田文によって、三冊揃いで刊行されたものである。『付録金剛索彈赤保保』の巻末(18ウ)に、各版とも、

文政己丑新鐫

南陽堂藏版(印)

の刊記を入れているが、これは、もともと、初版のものである。下に模刻されている「勢南森島図書之記」の陽刻印は、森島田文の印である。初版は稀観の本で、広く流布している再版の各種印本には載せていない森島田文の序が、巻上の首におさめてある。参考までに、次にそれを写しておこう。

擱裂邪網編序

黄帝遊乎赤水之北。登乎崑崙之丘。而南望帰還。遺其玄珠。使知索之而不得。使離朱索之而不得。使喫詬索之而不得。乃使象罔。象罔得之。是雖固出於莊周之寓言。而意正適仏教。蓋有為見解局校量長短。夷者不可因跡而索。因跡而索。則真智隱於念慮之中。不能見真理。必無為所以能有得于此也。雖然未了之士。先辨邪正本末而後應適道。是以仏姑說一念。說無量。說有說無。說大說小。說一說二。說方說円。說西說東。惟是一味之法。而応機之方便。大悲之善巧也。至究竟則羚羊掛角。無跡可見。所謂無法一

之与人。無一字之可說。尋思路絶心境都冥。而真智妙用現焉。若徒局校量長短。則弥推弥隱。遂不与道契。不与道契。則群疑因以生。群疑因以生。則邪說暴行競起。其害亦靡所不至。昔北魏崔浩勸武帝。焚毀經像。坑殺沙門。行路見棄像。必下車溺之。後有罪腰斬于市。命溺其口。衆亦競溺其屍以称快。唐太史令伝奕性不信仏。集石像以為磚瓦之用。嘗对太宗曰。仏之西方之桀黠。無補国家。臣非不悟。鄙不学也。帝深惡其言。後得惡疾。徧身糜爛。号叫而死。是皆史籍所載。近世有富永仲基者。讀仏説。未得其骨髓。縊著皮毛外。以建邪議。其書称出定後語。竊取旧説。搜索異同。矯揉愾斷。妄點大乘。以諸教乃為後人妄説。雖從古詆仏者儘多。未有甚於仲基者。天刑不許。晚亦感惡疾自悔。蠶身一室以終。後又服天遊者逐其臭。著赤保保。果復癡狂。投井中而死。此举同日之談。其報不可道。仏説三報。是其現報者。而宿因礙当果。故於受者有遲速異。世人面見罪報之不均。蔑視因果。又党邪議都疑仏説。或亦有好事者。主張之。称以千古確論。故後学雷同相襲。熾犯誹法之罪。今也仏法弘流。海内不之碩学明智之人。然而徒坐視不介意。未聞能有闢之者。尤可嘆之甚矣。東都駒山潮音首座。有發憤乎此。乃著擱裂邪網及金剛索二篇。實一人当千。雖邪党発起。必所触無全手応手而断矣。謂齊其功於古竜樹亦可。故与偕謀之。授劔劔氏。若是書一出。仏敵忽可潛韞糸孔中。惜哉巨魁今既斃。不及親觀之。願信邪説者。宜於是書提醒以帰正路也。不然來報難測。誠可懼耳。而因果之説。原為執二辺者姑言之。若及語自受用三昧。則雖鬼神不能知其機。況顔孟失其智。管晏失其才。蘇張失其辯。賁失其勇。嗚呼。大乎哉是道也。不由他悟。人素自体不知而已。

文政十一年戊子晚冬

伊勢 旧華居士撰

管牛鳴拜書

再版でこの序が除かれたのは、版木が森島の手を離れたからであろう。そのほかは初版の版木で刷られている。

竜谷大学図書館所蔵の初版本『付録金剛索彈赤保保』(022. 35. 1. 貴重書)は、刊記の後の余白に、潮音の自筆で、

施入竜谷大講堂
以供大衆護法用
文政庚寅歲三月
東都駒籠西教寺慧海潮音和音

の書入れのある本であるが、その後表紙の見返しに、包紙の切抜であろうか、

製本所 伊勢松坂上職人町 深野屋利助

と刷られた紙片が貼布されている。初版の作製は、多分、深野屋が請負ったのであろう。縦 26.4 糎、横 18.4 糎、再版の各種印本より一まわり大きく、表紙は白色で、麻の葉に吉兆文散らしの型押がなされている美麗な本である。

再版の各種印本については、調査がまだ行きとどいていないが、『摺裂邪網編彈出定後語』のみの二巻二冊本と、『付録金剛索彈赤保保』を備えた三巻三冊本の二種類に、大別できそうである。二巻二冊で伝わるものの中には、伝来の過程で、『付録金剛索彈赤保保』が分離してしまったのではないかとと思われるものもあるが、多くは、はじめから『付録金剛索彈赤保保』を省いて売り出されたものようである。

ところで、この二巻二冊本のなかには、刷りの工合などから、三巻三冊本よりも早い時期に刷られたのではないかと考えられるものがあるが、その上、初版が稀観で、あまり識られていなかったこととか、現に竜谷大学図書館に所蔵されている潮音自筆の初稿本『摺

裂邪網篇』(022. 45. 2. 貴重書)についても、また、あまり識られていなかったというような残念な事情がそれにかからんで、文政十二年以前に、『摺裂邪網編彈出定後語』二巻二冊が刊行されたことがあるのではないかと、また、「文政己丑新編」の刊記は、その後、『摺裂邪網編彈出定後語』二巻二冊と『付録金剛索彈赤保保』一卷一冊とが始めて一具で売り出された時のもので、初版のものではないのではないかと、というような疑問がもたれてきた。初版を知らずに、再版の各種印本だけを集めて比較しているかぎり、このような疑問がもたれるのはむしろ自然なことであったのではなかろうか。わたし自身、竜谷大学図書館所蔵の初版本『摺裂邪網編彈出定後語』(164. 34. 1/2.)にめぐりあうまでは、やはり、「文政十二年刊」と言い切る自信がなく、『摺裂邪網編彈出定後語』巻下の本文の末尾に

文政二年歲次己卯末伽始羅月閣筆於東都駒
岳遊心法界樓南窓下

と書かれているのを鵜呑みにして、「文政二年成、初刊年不明」などともっともらしいことを言ったりした。『国書総目録』に、文政十二年刊本よりも早い文政二年刊本が数本現存しているかのごとく記してあるのも、国書研究室が編集の資料とした各図書館の目録の記載の不備に起因するものと想像しているが、根は同じ誤りである。

上に引いた文政二年閣筆の記事は、刊本の本文が成った時期ではなく、実は、初稿が成った時を記念する記事なのである。『付録金剛索彈赤保保』の本文の末尾にも、同じように、

文政辛巳仲春上浣第九日投筆於駒籠山東涯
普光堂円窓下

と書かれているが、これも初稿が成った時を記念する記事で、刊本の本文が成った時期と

考えるのは誤りである。

潮音は、文政二年に、初稿「摺裂邪網編彈出定後語」二巻を書きあげ、ついで文政四年に、初稿「金剛索彈赤保傑邪説」を書きあげて、文政五年に、これを二冊に製本した。「金剛索彈赤保傑邪説」は「摺裂邪網編卷下彈出定後語」の後に合綴されている。刊本では、『出定後語』の問題の箇所を一字下げで引用し、その後に「破曰」として自説を開陳しているが、初稿は、まだ、そのようなスタイルでは書かれていない。

潮音が手にした『出定後語』は再版第一種本であろうから、その包紙に、「近年勢州本居翁所著ノ玉勝間ニ此書ヲ賞誉セラレシヨリ四方ノ君子ノ蒙ヲコト頻ナリ」と版元の口上が刷りこまれているのを、もちろん、見たであろうし、おそらく『玉勝間』八の巻の「出定後語といふふみ」の章にも目を通したことであろう。潮音が無相文雄の『非出定』を評して、「其書簡略破斥未足」（題言・2オ）と述べているのは、それが経論の引証に雑であったがために、宣長に、「ひたぶるに大声を出して、ののしりたるのみにて、一くだりだに、よく破りえたることは見えぬ」と酷評されたのが、いかにも残念でならなかったからであろう。刊本に付した「凡例」の中で、

癡人多疑慮雖拳経論等亦訝其実今録卷緒以求尋検後人勿厭繁縷

と述べているように、執筆にあたって潮音がもっとも意を用いたのは、『出定後語』が論拠として引いている経論の文句と、潮音がその辨駁の論拠として挙げた経論の文句のそれぞれについて、読者が自ら原典にあたって両者の立論の適・不適を検討し得るよう、一々、巻数紙数を明示して、検索の便をはかったことである。宣長の「かの道のまなびよくしたるほうしといふとも、此出定をば、えしもやぶらじとこそおぼゆれ、」ということばをは

ねかえすような緻密な辨駁を構築しなければ、護法の資とはならないと考えた潮音の気組が、その仕事ぶりにはきりりとあらわれている。（もっとも、宣長のことばは、潮音の仕事にもそのままあてはまるというのが、今日、大方の評価である。）初稿もかなり丹念な仕事ぶりであるが、潮音がこれに満足していなかったことは、自筆初稿本の巻末に、その後の考案をしるした紙片が挟まれていることによって推察できるし、事実、刊本の本文は、初稿にかなりの増補改訂が加えられて成っている。おそらく、刊本の本文は、上梓のことが具体化する文政十一年頃に、まとめられたものであろう。

最後に、これも参考までに、自筆初稿本が刊本と相違している点について簡単に記しておこう。

書名は、薄褐色の表紙の左肩に直に「摺裂邪網篇 上」「摺裂邪網篇付録金剛索 下」とそれぞれ墨書してある。縦 25.0 釐。横 17.4 釐。「凡例」は無い。巻上の首に、刊本では省かれた次の序を載せている。

摺裂邪網編序

瞽者不辨黑白。而疑人之辨黑白。則縱令經千載。竟弗能論之矣。肉眼不見天眼之所照。天眼不識慧眼之所了。而容疑於夫不見不識之間者。則其惑踰夫瞽者。豈啻千百而已乎。縱令有離婁之明。師曠之聰。肉眼竟不能識慧眼之境。不識而疑。豈可不謂至愚乎。若夫至修得彼。乃無尽境界明々々々。猶如視掌中奄摩羅菓。則却愧前疑之極大矣。喻之如夫瞽者。一旦豁然。兩目忽明。而自辨黑白。則却愧前疑人之辨黑白之極大矣。近頃有一士。恣披闕大藏。而撥諸祖之指南。信自之胸臆。而穿一大邪坑。加之酷慧捷辨。至謂我之大乘諸修多羅。咸後人虛設也。猶均瞽者。罵謂日月有大光明。万物咸在此中。乃人之虛設矣。苟具慧眼者。誰不流涕乎。

自着書。題謂出定後語。承風徒襲重之。恰如金科玉条矣。嗚呼悲哉。時今属澆季。人無實行。好趨新奇。蚤不排之。則蔓延盛大。終一首引衆盲。皆墜深坑矣。予友駒山音上人。學識淵博。才辨雄朗。恒以護法為懷。一閱此書。或悲或懼。疾欲扶彼妄膜。開衆之慧眼。採筆就藁。不日成兩冊。題謂摺裂邪網編。博援經論。治揭正理。盲醫頓消。仏日増光。豈不一大法事乎。恨不使起夫一士于黄泉下。如夫瞽者一旦豁然。兩目忽明。而自辨黑白。則却愧無疑人之辨黑白之極大矣。冀承彼邪風徒。熟讀此編。乃為翻前之謗舌。而翼贊我之真乘。則作者之悲懷。正可謂尽于斯而已矣。若夫徒至稱上人之學識才辨者。乃尚未免瞽者之域云尔。

文政壬午夏五月

東都喧丘沙門蘊和南

なお、第一紙の折の間に、この序の初案を記した紙片が挟まれている。

瞽者從來不辨黑白而疑他人辨黑白縱令經千歲竟弗能論焉肉眼不見天眼所照天眼不識慧眼等所了而容疑不見不聞之境者則其惑踰彼瞽者矣雖有離婁之明師曠之聰肉眼不能識天眼慧眼之境況於法眼仏眼乎若円具五眼者無尽境界明々了々猶視掌中菴摩羅菓也亦奚疑焉會有一士恣披大藏而撥諸祖指南叨作一書号曰出定後語乃云大乘修多羅皆是後人偽造承風之徒信受其語恰如金科玉条吾友 潮音師一閱此書以護法為懷將扶彼盲膜採筆就稿不日成兩卷題曰摺裂邪網編博援經論諸書治揭正道正理盲醫頓消魔網已裂冀承邪風徒熟讀此編翻轉彼傍舌翼我真乘則作者悲心尽於此而已若徒称上人文政壬午夏五月

付記 貴重図書の閲覧につき、再三御配慮いただいた竜谷大学図書館に、紙面を借りて、篤く御礼申しあげる。